

本校の SSH 事業の取組が 大学新聞社発行 全国版教育誌 『「探究」への導き 2026』に掲載されました！

本校の SSH 事業や探究活動について、大学新聞社発刊の全国版教育誌『「探究」への導き 2026』に掲載されました！

4ページにわたる特集となっており、特色ある探究活動に取り組んでいる学校として九州地区の中から1校だけ選出いただきました。本校の SSH 事業や探究活動に関する思いについて、本校職員や生徒のインタビューをもとに掲載がされています。

今後も「最先端の学びを日本の西端から創造」できるように、全職員、全生徒で SSH 事業を推進していきたいと思えます。

掲載された記事の内容は、次ページに載せております。



※大学新聞社の記事につきましては、無断で転載することを固く禁じます。



長崎県立大村高等学校

1～3学年

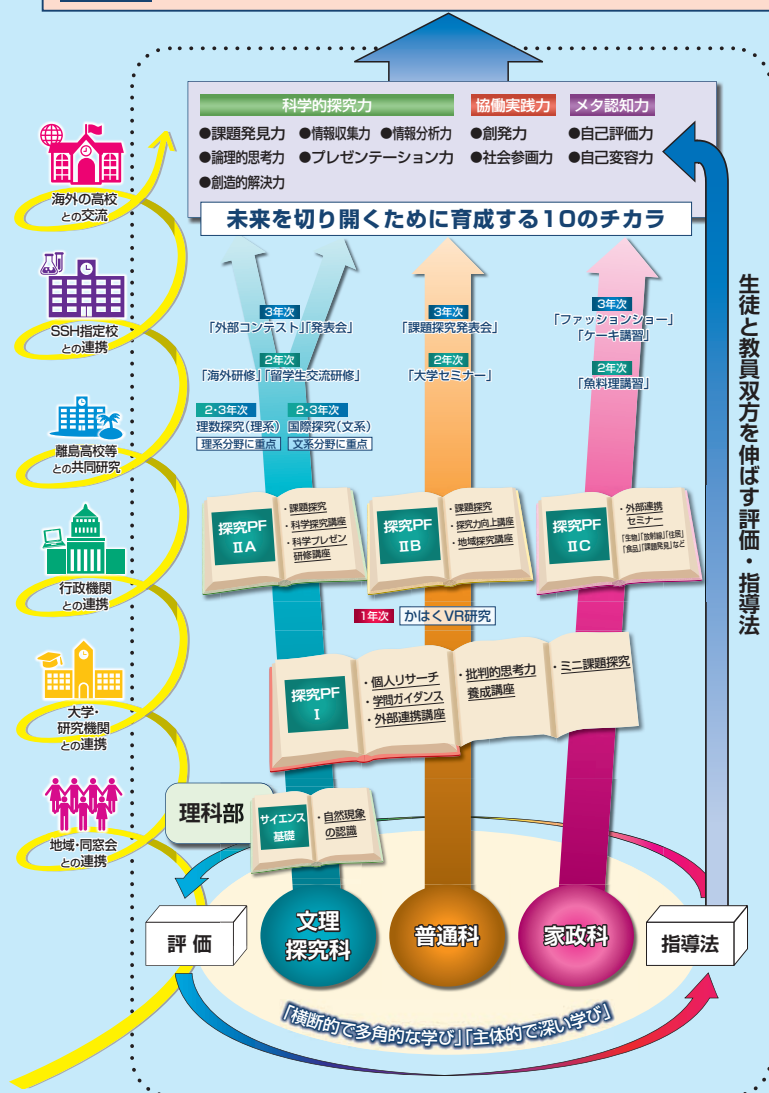
「課題探究」

平成6年度の「理数科」設置以来、「課題探究活動」に取り組んできた長崎県立大村高等学校。「高度な科学的思考力と豊かな発想力を持ち、新たな解の創発に向けて行動する資質や能力の養成」を目標として掲げ、所属学科にとらわれないこと、すべての生徒の主体的な発想を尊重しています。積み上げてきた経験とノウハウを活かし、生徒たちを学校教職員全員でバックアップしています。

大切なのは結果に至るまでの「プロセス」を学ぶこと
多様な体験を通して将来に活きるチカラを身につける

SSH事業(第Ⅱ期)を柱とする創造的・探究的・教科横断的な学び

目指す人材像 高度な科学的思考力と豊かな発想力を持ち、新たな解の創発に向けて行動する人間を育成



大村高等学校は、平成30年度にスーパーサイエンスハイスクールの指定を受けたことを契機に、当時「課題探究」を行っていた理数科に加えて、すべての学科で探究活動を実施するようになりました。探究SSH企画部の川久保晃一先生は、探究活動について、難しいと構えずに「ワクワク感を抱いて欲しい」と語ります。興味・関心をもとに探究活動を進める生徒たちを支えるのは、教頭先生も含めた学校全教職員。年々活動が活発化していく流れの中で、探究活動をより深く豊かなものとするため、日々奔走されている先生にお話をうかがいました。



川久保 晃一 先生
探究SSH企画部 主任

探究で培われたチカラが一人ひとりのキャリアを拓く

「まず、体験してみる!」という構え
全校生徒・全教職員で取り組む

本校では文部科学省から「スーパーサイエンスハイスクール(SSH) [開発型]」(平成30年度～令和4年度)の指定を受けた平成30年度から、学校設定科目等を「課題探究」としています。

「課題「研究」」という名称を採る学校が少なくない中で、なぜこのようにしているのかというと、本校には、生徒に対して、「探究活動の結果だけを追い求めるのではなく、そのプロセスの習得を大切にもらいたい」「探究活動に対して難しいと構え過ぎず、ワクワク感を抱いて欲しい」という想いがあるからです。

SSHというと、将来的に理系を志望している生徒だけに限られるものというイメージを抱かれがちですが、本校にとって初の指定で第Ⅰ期となる指定を受けた平成30年度当初から、第Ⅱ期(令和5年度～9年度)の指定を受けている現在に至るまで、文系・理系に限らず、学科の垣根を超越して、「文理探究科」はもちろん、「普通科」「家政科」も含む全校生徒・全教職員で探究活動に取り組んできました。

このような背景から、本校の探究活動では、「まず、体験してみる!」ことに重点を置くようにしています。机上の学習だけではなく、さまざまな体験を通して試行錯誤しながら必要なスキルを身につけていく実践形式でプログラムを進めています。

1年次で基礎を楽しく学ぶ
探究に失敗はなく経験が残る

1年次の前半では探究活動に必要な知識や技能を習得するプログラムを体験していくこととなりますが、まずは探究活動をポジティブなものとしてほしいため、4月の始めにコンテスト形式のプログラムを用意するなどして、「探究活動」が楽しいものであると思ってもらえる工夫

をしています。1年次の後半は「ミニ課題探究」に臨みます。文理探究科と普通科において、2年次から行う「課題探究」では、テーマ設定も生徒自身が決めるようにしています。班編成も生徒の希望するテーマや分野をもとに行います。生徒が望む方向性やテーマを優先するため、時には文系・理系の枠も超えて班編成を行うこともあります。心許なくハラハラするようなテーマを持ってくるケースがないわけではありませんが、生徒がすべてうまくいくようにレールを敷く必要はないと考えています。

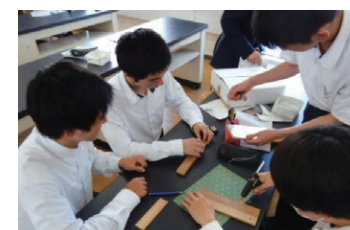
仮に、最終的にうまくいかなくても、それは「失敗」ではなく「経験」であるとの考え方です。そこで学んだ考え方や試行錯誤すること、また協力するといった姿勢が、この先の大学や社会人生で生きてくる場面が必ずあるはず。課題探究を通して、考え方やスキルを身につけて、次のステージに飛び出していくことを期待しています。

一見難しかったり、答えを急ぎたくなるテーマがきても、あくまでも生徒に伴走するイメージを決して崩すことなく、「これ、どうやるの?」「どうしてそうなるの?」などというところ、生徒が自分たちで動くというところに重きを置いて活動を進めていくようにしています。3年次の7月にポスター発表があるため、生徒とやり取りを重ねながら、形にしていけるようサポートしています。

探究で身につけた力が源泉
志向に従い未来を切り開く生徒

SSH第Ⅱ期として、「高度な科学的思考力と豊かな発想力を持ち、新たな解の創発に向けて行動する資質や能力の育成」を目的に探究活動に取り組んでいます。特に「行動する」という点は、自分から積極的に動けるようになって欲しいという思いから、新しく追加した視点です。

これは、本校生徒の大きな特徴の



一つですが、以前から実直に、部活動や学業を頑張るという者が多かったのですが、1期の終盤に差しあたり始めると、外部とつながりたいと申し出てくる生徒が増えてきました。それだからなのでしょう、大人数の前でも物怖じせずに意見を言える生徒が増えている印象があります。私自身が高校生の時は、自分から積極的に社会や現場で働いている人に話を聞くなどという授業は皆無でしたし、考えたこともありませんでした。これは、すごいことだと思います。

また、進路選択という観点では、かつてSSHのプログラムを3年間経験した最初の学年の卒業生の中に興味深いエピソードがあります。コーヒーが大好きな生徒で、コーヒーにまつわる研究を本校で行っていた話を入試の面接で話をしたところ、その面接担当である大学の先生と意気投合したこともあったか、合格しました。その後コーヒーの焙煎に関わる会社を大学在学中に立ち上げ、現在は取締役として企業と契約を結び事業を続けているとのことでした。もちろん、あくまでも一例に過ぎず、特別なケースかもしれませんが、ほかの卒業生たちからも、「SSHの活動で学んだことがいま生きています」と聞くと嬉しくなります。

探究活動を支えるための環境づくりや教員のスキルアップなど、課題は依然としてたくさん残ったままです。しかし、SSHの指定校という特長を活かしつつ、これからも探究活動をより活性化させ、本校はもちろん、他の学校でも導入・活用できる教材の開発までできたら素晴らしいのではないかと模索しています。



探究

大村高校
探究活動
コンソーシアム

現在、大村高等学校では、生徒たちの探究活動を応援する体制を整えるため、「大村高校探究活動コンソーシアム」の構築を進めています。

大村市役所と連携し、地域イベントに参加して探究活動の成果を発表したり、「西海みずき信用組合 大村支店」を窓口にして、探究活動で外部とつながりたい生徒を企業とつなげています。

また、連携協定を結ぶ長崎総合科学大学、鎮西学院大学、活水女子大学にも探究活動専用の窓口を設けてもらい、生徒が探究活動の質問を気軽にできるような環境づくりに取り組んでいます。

探究のチカラを身につける多様な取り組み事例

大高探究ビルディング

入学後、早々に行う「大高探究ビルディング」は、新聞紙で何回か条件を変えながらタワーを作り、最終的にはタワーの高さを競い合うコンテスト形式で順位を争う取り組みです。その目的は、共同作業を通して、探究活動の楽しさとチームで協力することの大切さ、課題を解決するプロセスを学ぶことにあります。



かはくVR探究

1年次の「かはくVR探究」では、2年次に行う「課題探究」の一連の流れを体験します。国立科学博物館のデジタルコンテンツや県立図書館「ミライオン」から提供される文献資料をもとにしてポスターを一日かけて作成し、発表まで行います。クイズをポスターに盛り込むことで、楽しく作業を進めていきます。



ネクストジェネレーションミーティング

文理探究科1年次の全員が対象の「軍艦島研修」。首都圏から来た生徒と共に島に上陸するほか、元島民の方などからお話を聞いた後、保存の問題を抱える「軍艦島を今後どうしていくべきか」というテーマで討議、スライドの作成・発表までを行い、「正解のない問いについて根拠をもとに判断する力」を養います。



情報分析力育成講座

この講座では、データの集め方や読み方を学びます。例えばウェブサイト上の記事や調査結果等に関して、常に「本当にそうなのか」というクリティカルな視点から、情報を鵜呑みにしない考え方を身につけるほか、自分の欲しいデータを集めやすくするデータの採り方のテクニカルな部分を学びます。

OMURA STEAM LABO

東京学芸大学と相互協力し開発された学校設定科目「OMURA STEAM LABO」。「STEAM教育」としてデータの使い方や仮説の立て方などを学ぶほか、自分自身の「考えの型」や周囲の人々の考えを客観的に捉えられるよう「哲学」も取り入れ、討議を混じえながら、探究に役立つ力を身につけます。

学科ごとで推し進める「探究活動」「課題探究」の学びの内容

文理探究科

1年次は文系・理系に共通する科目を学びます。2年次からは「理数探究」「国際探究」のいずれかを選択して分かれて学ぶ流れの中で、「サイエンス基礎」や「OMURA STEAM LABO」などの独自の「学校設定科目」に取り組みます。1年次の「ネクストジェネレーション・ミーティング」「留学生交流研修」「海外研修」など、多様な体験を通じて、探究的な学びを深めていきます。



課題探究の実験

普通科

普通科と文理探究科の最大の違いは、普通科単独の学科行事が少ないということ。その分は、通常の授業や探究活動に取り組んでいます。

令和5年度からは共同研究校である広島大学附属高校との「課題研究」交流も始まりました。2年次では、大学教員を招いて専門的な講義を先取り体験する「大学セミナー」があり、3年次には、「課題探究発表会」も待っています。



最終発表会

家政科

2年次から「外部連携セミナー」をひと月に一回程度の頻度で受講します。生物・放射線・食品・住居防災など、さまざまなセミナーを受けながら3年次から始まる「課題研究」の構想を練り上げていきます。その「課題研究」では、生徒が自分でテーマ（課題）を設定し、1年間をかけて研究に注力。研究成果はプレゼンテーションで発表するため、発表する力も養います。



家政科 環境セミナーの水質実験

*1 スーパーサイエンスハイスクール 国際的に活躍できる科学技術人材を育成するために文部科学省が指定した研究開発校。新たな科学技

術人材育成に関するプログラム（教育課程）を研究開発実践し、その成果を普及することが求められる。研究開発指定は5年間。

*2 STEAM教育 理数教育に創造性教育を加えた教育理念。科学（Science）、技術（Technology）、工学（Engineering）、

芸術・リベラルアーツ（Arts）、数学（Mathematics）の5つの英単語の頭文字を組み合わせた言葉。分野横断的な資質・能力の育成を目指す。

探究インタビュー
課題探究

自分たちの興味・関心によってさまざまな探究活動に挑戦ができる大村高等学校。研究内容も研究方法も三者三様な2年次・3年次のみなさんに、探究活動の魅力についてうかがいました。

テーマ 酵母の抗カビ物質について探る



3年次 数理探究科 福本 美優さん

私は1年生の「ミニ課題探究」の実験で、天然酵母とカビと一緒に生きていられることに疑問を持ったことから研究テーマを決めました。

酵母が抗カビ物質を生成する可能性

があるという先行研究もあったため、その物質を特定できたらと考え、研究環境などを自分で整えた上で、さまざまな実験を進めていました。活動をする中で、外部の方に研究のご指導をいただいたり、そのつながりで紅茶メーカーの企業の方に菌の調査にご協力いただいたりもしました。目に見えない菌を扱うため、空気中の菌が入り込むことでデータが採れなくなるということも多かったのですが、その分、自分が予想した結果が出た時はとても嬉しく思

いました。研究内容を発表する機会を通して、資料づくりや専門用語を使わずに分かりやすい言葉を使って伝えることが以前よりうまくいったような気がします。手探りで研究を行い、自分なりの答えにたどり着けるというのは、探究活動の大きな魅力だと思っています。大学でもこの研究は継続していくつもりで、アドバイスを受けやすい環境で、より精度を高めた研究ができれば素敵ですね。



2年次 文理探究科（国際探究） 前田 英太郎さん

僕は個人用とチーム用で二つの探究テーマのもと、探究活動を行っています。もともとはチームの探究活動が主軸でしたが、歴史の先生から奈良県で行われた「歴史フォーラム」への参加

個人テーマ 大野集落や出津集落の潜伏キリシタンが禁教令下の長崎で発見されなかった理由

チームテーマ 海外の潜伏キリシタンと「ゆうこう」との関係性を大村藩と佐賀藩深堀領の藩政記録から読み解く

を勧められ、個人での研究も始めました。歴史、特に戦国時代や郷土史・町の歴史に興味があり、教科書で習う歴史よりも郷土史を探究したいと思ったことに加え、歴史の先生から「ゆうこう」と「潜伏キリシタン」には関係性があるらしいという話を聞いたことをきっかけにこのテーマに決めました。

正確性の観点から、漢文の書き下し文のような文章や旧字体が混じる一次資料を読み解く必要があったことが大

変でしたが、日本史の授業だとほんのわずかしかが登場しない人物が、郷土史では長文で書かれていたりするところにおもしろさを感じました。調べたことが一つずつつながって一本の線になっていく過程にもワクワクしました。大学でも地元の歴史を学び、いまは歴史の陰に隠れてしまっている地元の場所やお城を観光資源として活かせる方法を学び、地域に貢献したいと考えています。

テーマ 肥料による稲、ヒエの分けつ数の変化について



2年次 文理探究科（理数探究） 左 谷本 萌々華さん 右 平野 陽菜子さん

私たちは肥料の有無によって、稲やヒエの分けつ（根元部分の分かれ目）がどれだけ増えるかという調査をしました。農業や食べ物に関わる探究活動をしたかった時、担当の先生がお米

農家の方に対するインタビューの機会を設けてくださったことをきっかけに、このテーマを調べようと決めました。最初はデータを採るために稲を育てていましたが、部活動の終わりや授業がない土・日曜日なども毎日世話をするうちに愛着がわき、収穫できた時はとても嬉しく思いました。稲によく似た雑草「ヒエ」が稲に混入するハブニングもありましたが、研究テーマにヒエも加えることにし、柔軟に対応しました。稲を育てる上で、地元で町おこしを

しているみなさんや、農家の方などいろいろな人と話をしたり、活動をきっかけに貴重な体験ができたりしました。特に、毎日の食卓で何気なく食べていたお米がこれほどまでに手間暇をかけて作られていることを知り、大変な部分だけではなくお米や農家のみなさんに対する感謝の気持ちを以前よりも強く持つことができました。3年次の発表の際は、農家のみなさんの大変さを伝えつつ、農業に対するイメージが悪くならない内容にしたいと思っています。

*3 潜伏キリシタン キリスト教禁教政策期の17～19世紀の約250年間にわたって、社会的には普通に生活しながら内心は

キリスト教由来の信仰を続けようとしたキリシタンのこと。キリスト教解禁後もカトリックに戻らなかった「隠れキリシタン」とは異なる。

*4 歴史フォーラム 奈良大学と奈良県が主催する研究・発表の大会。参加高校生が自ら設定した課題について調べ、考察

し、探究する楽しさを実感してもらうのが目的。歴史・地理・文化財・文学に関する研究内容を全国から集まった高校生が発表する。